

宇和海にそびえ立つ遊子水荷浦の段畑

— 愛媛県宇和島市 —

東京大学大学院農学生命科学研究科 木村 匡 臣

1. はじめに

水面の穏やかな宇和海に切り立ってそびえる石垣で造られた急斜面は、遠方より望めば海に浮かぶ巨大な砂丘を、近くに見れば白い城壁を連想させる。本誌表紙写真は、愛媛県宇和島市の遊子水荷浦（図-1、写真-1、2）の段畑にて、その石垣の絶壁を見上げて撮影したものである。（宇和島地方では段々畑のことを段畑と呼ぶのが一般的だそうだ。）写真中央に写るレールは、運搬作業用の農業用モノレール（写真-3）である。頂上へと向かって延びるその形や傾斜に、モノレールがなかった時代の段畑での作業の過酷さや恐ろしさをより強く想像させられた。

2. 遊子水荷浦の段畑の概要と歴史^{2)~4)}

水荷浦は、豊後水道へと延びる三浦半島から、宇和海へと分岐して突き出た岬の一つにある集落である。その東南側に位置する傾斜40度ほどの急斜面に、高さ1.5mほどの石垣によって支えられた幅約1mのジャガイモ畑が、等高線に沿って這うように段をなして積み上がっている。その段数は50~60ほどあるであろう。以下では、本地区における生業や段畑の変遷、景観の保全に向けた取組みについて簡単に紹介する。

水荷浦の名は、この地が水に乏しく、生活に必要な水を担いで運んでいたことに由来するとされている。この地区から外へ嫁いだ女性は、実家に帰る際に水を天秤棒に吊して土産として持ち帰った、という話も伝わっているそうだ。

水荷浦の起こりは、中世または江戸時代の初期ごろで、宇和島藩が宇和海のイワシ漁場の開発に力を注ぎ、沿岸部に次々とつくられた新しい漁村（新浦）の一つとされている。沿岸部には稲作に適した土地が少ないため、人びとは山の斜面を開墾して畑とし、そこで雑穀類を育てはじめた。人口の増加した江戸時代の終わりごろは、斜面一面に段々畑が広がっていき、当時伝えられてきたサツマイモが重要作物として栽培されるようになった。

明治初期には水荷浦の斜面はほとんど開墾され、8,900枚もの畑となっていたとされている。ただし、当時はまだ石垣による段畑ではなく、大雨が降るたび

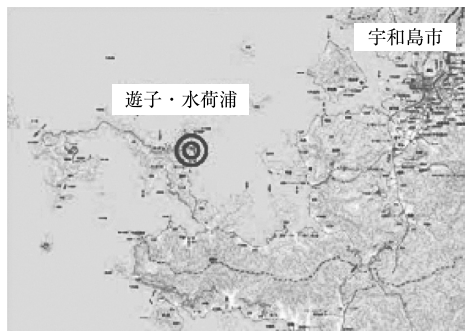


図-1 遊子水荷浦の位置¹⁾

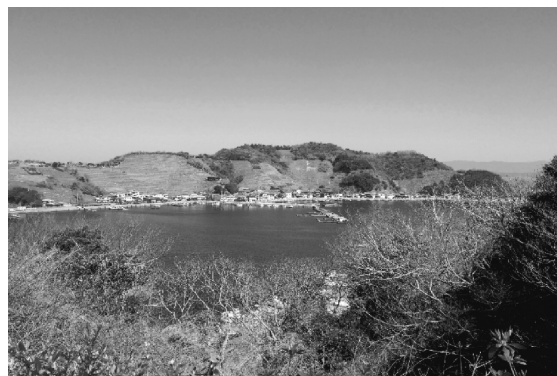


写真-1 対岸より望む段畑の石垣



写真-2 段畑中腹からの眺め

に表土が流出してしまうような状況であった。収入が少なかったために、人を雇って石垣を積むことがかなわず、段畑の石垣化は村人の夢であった。その後、養蚕の興隆によって栽培作物は桑へと変わり、その収入

で段畑が石垣造りになりはじめるのは明治末から大正にかけてのことである。

昭和初期には養蚕景気も終わりを告げ、村の男性はイワシ漁へ出て、老人と女性は畑で再びサツマイモの栽培をするようになる。戦後の食糧難の時代には、さらにサツマイモが増産され、デンプンや酒用アルコールの原料となる切干としても出荷された。当時の供出制度の下で、切干はコメと同等の価格となることもあり、「切干景気」は段畑の石垣化をさらに進めることとなった。

しかしその切干景気も昭和20年代後半から30年代には生産過剰により大暴落してしまう。その後、冬に植えつけて春に収穫する早掘りジャガイモの栽培に成功し、これが高値で売れたことによりジャガイモの生産が盛んになった。

そのジャガイモも昭和39年には生産過剰で暴落してしまい、周辺では栽培が急速に縮小したが、水荷浦だけは土と日当たりの良さが向いているとの理由で栽培が続けられることとなった。一方で、昭和30年代後半にはじまった真珠やハマチの養殖産業が軌道に乗り、地域の生業は養殖業へと重点を移していった。養殖産業の成功により、昭和40年代には宇和島周辺は全国屈指の養殖産地となったが、生産効率の悪い段畑の耕作放棄が進み、最盛期には30haほどあった水荷浦の耕作段畑は平成に入ると約2haまでに減少してしまう。

3. 景観保全のための取組み²⁾

そのような中、2000年に地元有志を中心に地域おこしグループ「段畑を守ろう会」(2007年よりNPO法人)が設立され、段畑の復旧、段畑オーナー制度の導入、収穫祭の開催、交流施設の経営などを行っている。

さらに2007年には、全国で3例目の重要文化的景観に指定された。その解説文⁵⁾では、段畑の管理状況について、「石積の随所には登降用の石段があるほか、左右の両端には耕作者が登降するための通路と大雨の時の排水路を兼ねた石組の溝が設けられている。乾燥した土質に基づき、全体として精巧な構造を維持しており、耕作者による除草等の管理状況も極めて良好である」と評価しており、「宇和海沿岸の急峻な地形や強い季節風など地域の風土とも調和しつつ、近世から近現代に至るまで継続的に営まれてきた半農半漁の土地利用の在り方を示す独特の文化的景観であり、我が国民の生活又は生業を理解する上で欠くことのできないものである」との価値を認め、選定理由に挙げている。



写真-3 運搬作業用モノレールと石垣

現在では耕作段畑は5haほどまでに回復し、年間約2万人がこの地を訪れているという。

4. おわりに

土地利用の形態は、その場所における時代ごとの歴史や文化、生業に応じて変化し続けるものである。遊子水荷浦の段畑のように、その変化の流れの一部分を切り取って残し、かつての景観を復元、保全しようとする取組みは、大変な労力を要することは想像に難くない。しかし一度その景観を目にした人は、(筆者もそうであったように)その成立の経緯やこれまでの文化の変遷に自然と興味が湧いてしまう。

「段畑を守ろう会」では、さまざまな芋商品や地元特産品の販売を行っているが、中でも段畑で収穫されたジャガイモを使った焼酎が人気だそう。水荷浦の数々の変遷を見守った段畑で南予の太陽の恵みを存分に受けて実った味を堪能しながら、この地の人々の営みに思いを馳せるのも一興だろう。

引用・参考文献

- 1) 農林水産省：遊子水荷浦の段畑(ゆすみずがうらのだんばた)―「耕して天に至る」―, http://www.maff.go.jp/j/nousin/sekkei/museum/m_keikan/yusu/ (参照2015年12月15日)
- 2) 段畑を守ろう会：遊子水荷浦の段畑ガイド, <http://www.danbata.jp/index.shtml> (参照2015年12月15日)
- 3) 宇和島市観光協会：スペシャル企画 Vol.3 遊子水荷浦の段畑, <http://www.uwajima.org/special/vol3/index.html> (参照2015年12月15日)
- 4) 寺門 充：ガイド にほんの里100選(第17回) 遊子水荷浦(愛媛県宇和島市)海を見下ろす石垣の段畑, グリーン・パワー 438, p.34 (2015)
- 5) 文化庁：国指定文化財等データベース, <http://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/> (参照2015年12月15日)